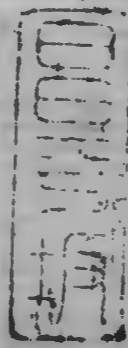
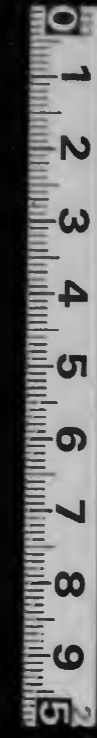


藩鑑

井伊

庫	文	閣	内
二五八函	二八〇冊	三四六八二號	和書類

百六十九



内閣文庫	
番號	和 34682
冊數	278 (169)
函號	159 1

藩鑑卷之三百十目錄

為部一

井伊兵部少輔藤原直改

藩鑑卷之三百十

井伊

兵部少輔後永直かち改肥後守直親かち此  
長男りり童名と虎松とかち以後  
万千代とかち父直親遠江國井伊  
谷に任して今川家の麾下たり  
永禄五年其臣小野但馬道好諺に

よりて朝比奈宗徳中へ春能より  
かくて後直改、母遠江國より来り  
松下源太郎清景より再嫁せしむ直  
改も亦其家より養ひてし松下と稱  
す天正三年二月十五歳のとき  
東照宮濱松に城下り放鷹し強人  
れ序路邊よりし直改と言覽あり  
別ち石よりして任じたりし例

と離すし勅浴化ししところりかく  
し父祖の由来と言上せしとき今  
より井俣氏より復すしこの命と  
かりあり且祖先歴代の舊地井俣  
谷とよまはる同十年七月氏田家  
滅亡の地ち彼家の従士及ひ關東  
に處士と附屬せし兵為みお赤  
色と用甲しし命とかりあり

駿河安部郡よとして四万石と評  
賜す同十六年從五位下位從よ  
叙任一同十八年關東正入國の後  
上野國箕輪城十二万石と賜る  
慶長五年關原正凱旋の後近江國  
作和山城と賜り六万石と加ふ  
了し都して十八万石と領す同六  
年正月從四位下よ叙一同七年

二月朔日四十二歳よとして卒せり

一 天正三年二月十五日

神祖深松城邊よ放擧一浴傍よとして

一童子と見たまよと容貌端素よとして

英雄の相あり

神祖姓名と同一たまよと駿州今川の  
臣井伴信濃守直満の孫肥後守直親の子  
万千代と養ふ年十五又其氏族と同一

たまたまよ。祖父直満、遠州井俣谷の城  
主なり。永禄二年、今川義元よあつて、  
尾州福狭るよ。ついで討死す。父忠親、  
左兵衛尉但馬守、後よ。ついで氏志  
忠親よ亡さん。ついで氏志の一族新野  
馬助親親よ。忠親罪あつたの状よ  
のふ氏志其刑よ。宥むよ。ついで朝比奈  
泰能よ。あつて。已よ。直親よ。代つ直親

終よ。我死す。ついで。さ。我僅よ。二歳なり  
既よ。我も刑よ。あつて。ついで。さ。ついで。さ。ついで。さ。  
親親母子よ。ついで。引取養育す。ついで。さ。  
版尾致実氏よ。ついで。叛く親親よ。ついで。攻めて  
終よ。命よ。預す。親親。後室。於我よ。養育  
す。氏志。是よ。ついで。刑よ。加へん。ついで。親  
親。叔父。淨土寺。住僧。の。ついで。潜居よ。  
ついで。後。鳳。来るよ。居す。我。母。再。以。松。下。源

太郎よ嫁一我も又松下の家よ富平  
今この地よありとよ

神祖且誓さ且憐みささし入即日深松  
城よと一先祖累世の舊領ありとし  
井伴谷と湯より井伴の平姓と落家り  
一の井伴と改と称し井伴谷の三家  
近後秀用裕不重好管治忠久及ひ本保清  
長歩の吉勝標系治長歩の西郷後長歩

其外兵力れ士と附けたまふ  
人二川志  
井伴家事記

一 天正四年の春甲州の勝頼遠州言天祚  
近而采系よとして正合戦のとらさ

権現極陣小正のうちよ正体長持さ  
此の而夜中悪の敵近後氏分とす者よ  
正改ら此沢の百よし正付取あさ此の  
甲

権現極殊の外正歌よして正感ふ斜る

丁十倍れ也加増よし二千石と進す  
かり 井伴家信記

一 井伴兵部少輔及正若年のころより毎  
日朝七つころ也起灯と立髪と也申しせ  
らまのまゝ惣家老ともしめわく申る  
草履取よしとまてし夜のうちは髪

申しす 聞見集

一 天正六年三月朔日

神祖近、駿州へ正散是ありつさ申へ淡松  
れ築営ありく是とくめく七日  
淡松れ城と正進散然川の城よしり  
たよし今度井伴万千代正改初陣  
少く菅沼後正定改よし命し甲曹と名せ  
らり八日

神祖大堰川邊よし正勅親孫と駿州志  
太郎田中の城造よし甲一闘りの孫



井伴万千代時よ十八歳いしと戦ふこと一死よ  
勝る親もその豪傑の志ありと甚歎るす

大之川志武徳編年集成  
國朝大業廣記

一天正十年十二月井伴忠政性爽敏よ  
といふも弱冠よさらさらとさり  
戰場よ勝ても英氣死よふ之毎よ功と  
抽する事屢りて  
神祖深く寵遇めりて甲州有譽の將

山縣三郎兵衛原隼人一條右馬つちまらぬ  
忠義、部下の舊士豪壯の者七十四人圍  
束れ浪士戰場有名れ輩四十二人駿州  
先隊の三枝組よて十四五騎信州の  
士よて八十騎と撰ひ固ふとて忠政  
よ屬せし北条氏四万石よ討つま  
且山縣三郎兵衛上州の先隊小幡上総守  
隊、旌旗着物る餘無餘者ことくく

赤色と用甲直改も彼の二士は武畧に似  
たりやういと主隊の志章と赤色に命  
せしるる属せしるる甲士のうち廣瀬  
に長馬の二科肥前二士の武田家よしの  
豪傑なりは廣瀬は白髭張二科は金の編貫  
は産物の死人のあつたり赤備の中  
よしても彼の二士の元の子とく主産物と  
用甲とと命せしるる山縣は親士とを

石原主膳貞石備前及は廣瀬郷長馬の三  
科肥前等ととてし甲く汝等々武名世  
に多き甲一騎鞍の直改よ附属す爾来  
汝等んと盡し軍旅の長と甲一甲信  
及は越の家法よして若と用ひ忍とあり  
太平よ武と忘てしを練習とあり今日  
附属と命すなり死士各志と命せ直改と  
英物よありとと命せしるるを席よ



作せしめて甲冑とししもの旌旗器物  
鞍轡鞍よりしりしはし皆一色よ赤色なり  
とせしり後ち所のこころくわりし  
井俣家よ新よまるとししあまの武具  
を以軍令と見せし物の具皆新し赤  
色ししして百石よ金二十両具足櫃し  
袖のまのの士徳取し城中の庫よ入金  
を懐し緑の内しりしりしりこの甲よ

井俣家の武具關の事ありしし  
て化國よ新くしあまのまのの士武  
具よかきしりしりしり井俣家の  
軍令として赤色の武具の事記せし書  
も今世よ信りしりしり 常山紀殊

一天正十二年三月十四日の夜  
家康公尾州清洲城よし軍出陣定是  
あり

家康と作左とく、小牧山、尾州のふ  
中よりこの山と取らるる軍よ、勝  
へさ地裡より是へ折出候と搦へ秀吉の  
卜向と為ち對陣仕らへさ百足明日大  
物見と出すと作左とく酒井左  
兵衛尉中、勝頼の長篠よし、此味方  
今の上方勢なりとこはありとくともこの  
方よ某ふとくやうらる者もゆり今の上

方勢よ軍の后知り、く者是らく、此  
何の手よとくへさ某は向ひしし  
敵小牧山よ后、輝と二筋揚へと敵  
后、さすり、輝と一筋立へと  
約束仕り、此へ往く  
家康と信雄と酒井、跡と追ひ小牧山へ  
出馬仕、而よ后よして小牧山、輝一筋  
立、此と此後、あさ此跡、此競ひあさ、此皆く

正光よと急さるて列礼せしむ  
井伴兵部少輔正政も入り赤備よし三  
千餘押太鼓と折してつらも静よし  
列中しく押集りし

家康も信雄も正徳ありて正感一成

了之書 源邊圖書院長久手合戦之書  
大ニ川志

一天正十二年四月九日

家康も長久手のうち猪腰原の東南に

山へ正急陣あささるよし岩崎山城の方  
よ當りて鉄砲の音響しく聞之  
随分と正急し勝つとすあして夜  
し明離る正急敵よ取付るし聞  
正物具あささる懸軍の掛聲あしく  
よ急しく正急いとしくとし能  
しる皆く正急し正急しと仰せら  
正馬よし正急長久手さして正急あささる

別ち言ふ本主水内後四郎正長つゝ五人先  
へ物見よつゝいさよはあゝゝゝあり  
し就海り正先手勝軍よして早  
正掛りあさしとて

家康とさあゝゝ掛りゆゝと正下知あり  
し十人の正鉄砲正沢よ井伴兵助が捕  
五改千八百餘正旗本正小姓元甲州元少  
正供任ゝま井伴直改一五の赤備れ

武者三千餘旗よ一連て山陰より押  
出り五改十九歳の若武者甲いして先  
より五よ掛んと任ゝまと之科肥前  
あのかれ腰とよ一早一掛りよま  
謀めりゆゝとも承引りよま  
近後石見吉秀用延付け是し固前よ  
め五改るれ口と引向けたゝま立山れ腰と  
一掛りよ

家康もも止るよ右之町あとの田井中と  
兵池よ追續さ止掛りあさまお武改勢ハ  
関東甲州の兵甲一山北腰と急いとりく  
とやして競ひ掛りゆと堀秀政の先手先  
と見して早見崗よ志さりおの山一引揚り  
南向よ押一ゆよつさむ一めの場武改  
勢よして取返すゆ兵池兵とも京方の叔  
京物の教よしてあ一取よ任きと種

よとのささけよ 同上

一 井伴直政ハ丸山北唯よして森茂龍るれ  
え多と攻合すさまお平松金次郎急  
井金次郎ハ程と合すよと見して馬引寄せ  
お宗り龍と振り掛りゆくと下知任る武改  
いちの浦兵右馬つ手程と抱して田の中と  
およきり出長可ら足陣の赤中へ程と入る  
敵三方より程と付け已よ付死と人々



而も中村兵衛二番よ、徳と入道実崩  
す共右馬つ、徳の相多と、兵右馬つ若  
黨川口彦助をり込めりす、よとあさ伏せ  
し徳下の功名任の丈より人教と、徳  
さして追崩す、井伴直改も自身宗込る  
上より組し、益多柄り、功名つ、よと  
井伴兵衛少輔諸勢よ、先立し敵の志

比目上

中へ強く、んとせ、れけ、と徳本  
石見吉太抱自身の先登、つくと割  
けれとも、初のかくれ、弱敵と、かき  
よあ、つらひ、よと常く、作  
せり、我今日、れ先登り、り功と、あ  
と、いんと、おも、いん者、つ、け、や、と、て  
を、り、出、自身、太刀、折、と、つ、よ、と、進、け、り、而  
安、後、彦、兵、衛、こ、進、よ、あ、り、と、言、ふ、と、け

けりてあはし兵に敵と難く切伏  
られけり お條安房守長久手記

一 長久手の合戦よ井伊直政ハ由之とい  
けりまより沓方の先陣すしてよ敵の  
後陣といちやかり敵散くよいあか  
さる先陣の勢と一つよりとりて  
返して我ハんとす直政ハ赤旗赤幟  
朝日丸をよつやさして山よりこゑ

よ死せあり一 登りま横さまのけや  
か敵意よいあまけてたおめま  
うたき一ハ士卒ハ狂ふよ及つす  
赤家の者とも直政と赤鬼と名つけ  
一ハこのときよりの事りりり 善幹 譜  
一 赤君ハお牧山よとして四月十日十一日  
日れる人係治石屋の忠作内後四郎  
馬の正成渡邊守龍守綱よ命一以後諸

士は戦功と礼し、まゝ取らば首数多

き、井俣直改、多かりりり 國朝上業廣記

一 天正十二年六月敵尾州下野の城に

せむ直改、このとき松葉の里に陣取

て、この告と聞しりし、煙と漲りし

就むし、あましものも取めくす散

し、りりして引返す、あまの戦ひ、秀吉の

軍、ことくく利と、あひぬ 常山元孫  
藩幹譜

一 信濃の佐人、志田駿府へ出仕し

家康、極に腹立ちありて、此分國の人、教と

志田退治し、き、さ、し、澤和棟ありとも、三

枚橋より、此出陣あり、さ、し、

家康、極に此馬、い、して、此旗本、井俣兵次

少輔、及、大、抄、し、て、き、さ、し、き、あ、教

度、お、り、之、の、元、多、く、少、とも、兵、次、少、輔、及

采、幣、し、り、て、か、け、引、あり、つ、り、や、い、し

承りり北志田を後降美ありて駿府へ  
出仕しつゝさき

家康極一志田のあ度送らりり

聞見集

一天正十四年

家康の北上洛秀吉某の母のまゝり

家康の惟とさー一並りると北たる

井伴兵部少輔とさーものりると作あり

秀吉作せしりり一聞及ふ武士りり

年長久手合戦のとき我者とも赤鬼  
と号たるものりり歳ハ當年ハ久  
りりとして作せしりり二十歳一成り  
北登りありけしハ秀吉聞一とさし  
家康ハ名譽の人りりハ度我等の母  
家康の命の代りり我々命の番と  
中付る内ものもぬも亦ハ歳蒼の花れ  
ことくりり作たれと持たすハ事と

称あり彈正早く早蒔脚と哉——と  
しとの儀よ大改而と兵部少輔同ん  
任りよりとと作哉りり  
續武家閑談  
校合雜記

一天正十四年の冬東西の正和誅お誓ひ計  
川ハ

神君正上浴あり——秀吉正対面お師  
上よして秀吉——さうハ我々母よ早く  
逢へば早くと返——アハとして正下

向あり大改而正上りの正粟田よして  
追ひ——して正出有しを正よ與と止め  
して正対面ありして久くと正苦勞の正正か  
けよして天下太平よお成り——正礼作  
ち々此の後正與とハ今少——正魚とと  
して送りありさる井伊兵部ハソハよ  
やと死々——とさよ浅野彈正春去  
よして是よしてゆとアハ秀吉早く大改

此例へも一子ありて帯せし事一刃服  
指とも自身よ兵部へいまりそ外  
懸勢り事よてあり一とあり又  
一り一回よ無楽一海へ送りけり

明良洪範

一天正十四年十一月十九日大改而し海  
京あり送りよつさ此送りと一て井  
伴直政とをいさしり而よ大坂へ海城の  
後大改而し一の所への女よても

口と揃へて直政の儀と誉上げし  
一ささきよよ取成りゆよつさ香吉  
によも満悦あり兵部とことありて殊  
此外よ就乞しつさ此あとの贈りもの  
あとなまりゆとあり

長中齋徳集

一天正十四年  
家康公香吉と此和賂ありて此入浴  
ありかくて

家康公圖説し還沛ふさき一々四月十  
一月十二日大改而海國とて一して圖説と  
此立あり井伴兵部少輔直政とお漸  
ら小日と短して大坂よ志たすし秀吉  
公喜收浅くすし大改と種々餐意あり  
甚く交好の友りりとして石川伯耆守  
教正とお伴とあささりあつとも  
大改ハ教正不忠不義の所海と忍とし

餐意終らまて遂よ一言とも通せず  
其後秀吉公此茶たまりけりよ又教  
正と相伴とせしるる其時大改秀吉の  
近習其輩よ向ひ人面獸心といふこの  
教正よしゆとや徳代相結の主君とと  
むさ今秀吉らよ属す不義といひ怯  
弱と云哉きいり其の交りさすものよ  
あつるといふと何と放し云解らぬ一言

としりさすりて退り諸人皆石  
川、不義と笑ひ直改、豪氣と感  
けり  
續氏家評林賞代記  
異中後集

一天正十六年戊子四月十日  
秀吉と聚樂  
亭、初幸の節直改ら

権現様の正供よてあり  
直改らの正官位も正  
家康の正家系の中よ  
正官位は是あり

方一人是あり  
松平右近監  
先証と水り  
直改は徳大

又よ正昇進是あり  
正官位は是あり

家康と正頼は是あり  
正官位は是あり

正改ら正官位  
正官位は是あり



近衛九條家筋なり諸大夫は家の家  
来より多く是あり官位なりは當流五改  
諸大夫よりりしは末代家の祇一家  
れ為しは軍一々す一向無官官は  
手つす官位昇りなりは諸大夫は  
始別諸大夫ありは辭退しはなりと  
念ふありは内證是あり甲一五改と思ふは  
明孝流の中より諸大夫より一人は是あり

る時帝位後の官位はしと思ふは  
へとしは織冠の家筋系圖の由緒ありは  
龍山と密儀の通と作しはなり  
権現権右の旨秀吉之作後せらなりは  
官位の事は家々の先始是ありなりは  
織冠の家筋終より諸大夫よりりしは  
是ありとありしは諸大夫よりりしは  
との事お跡しはなりは秀吉よりりしは河内

勝よして実母を改而して此念こゝろよ成  
了まむと改の事能く此意知の事なり  
其帝右の事け滞りくお跡の昔よそ  
早速侍従よ此昇進是あり初幸の帝  
家唐の侍奉の中よして此改の一番之  
此出あさよ此帝

権現権此家来此瑞代古老の流中も是  
あり此のとも侍従此昇進成さよ此の

當此此出流も有りよして是あり大織  
冠此家筋甲一侍従此昇進控さよ此の  
了よしてまむ初幸侍奉の流中和歌  
と縁一よこまむ此甲一此改のも其人  
教よ此加り寄此祝の題と賜り知歌  
一首と報上控さよ此歌よ

立よふり此代のみとりの事あり  
此れ齡ひと君も魚好一



権現様この趣と下関へ作達せしる是  
し候て別ち兵船反と信從し作付り  
此由より武功雜記

一天正十八年此春關白反相模のお條と  
うらまへしとてしと改

徳川殿の先陣一つしてお田原の城より  
向ひ蓮池よりとせし陣ととり  
六月廿二日の夜直攻り一勢外郭と攻破り

松平周防も康親同くつゝく城中  
しもし山角上野分父子二人沢の城と奮  
まきしと散くし防さ殺しつゝく此方  
おけれしと改康親引返す

は時しお田原の城と攻りしより百  
餘日しとせ多れ軍勢二十餘万城中より  
寇り而し七箇國の精兵りりしとてとも  
多しとてしと殺ししと事し直攻り一勢

ととさこ之けら又壘改々攻破り  
而して篠曲輪と申して城れ東より  
又ハすして曲輪とも申し城中より橋  
一筋と後して是ハ兵と申して是ら  
す

徳川殿より直改と申して橋々橋  
と申しりるとハせたまひし又仰り  
る昔もあハ壘改つらう事とと

ふ江すか々くあんハるらひて  
つらさよもかの橋の下れ浅深とや問  
せたまふと橋れ下よ杭たして水の  
深さともりりを杭とささみして程  
もあつらふけまみつら水際よ  
あり立てしよく見おんせし滞前  
よりかくと申せよハのこ  
とく橋々橋々とるり仰ぢりま

直政いよくふ池すとうくめん  
るりふ知とよそ一の作と承り  
一り四十八日と短してさつとめん  
一みつ〜夜よ入して悪ひり彼橋  
とみしてん〜は朽弱く〜て  
〜はあやう〜いとさありて  
は〜と〜と〜と〜と〜と  
徳川殿との事よしてことあまかた

此事あたらふさあ〜んと思ひ  
〜の事とい〜りさかた  
此事ト知せん  
家康の身よとつて似合ぬものと  
の〜直政ふよおもひ〜して  
は〜直政の勢よしてせめやふ  
と〜あま〜かの橋の  
かくとらせた〜は直政やふと

もは楊と激りて汝れ城と破らんよ  
ハ西方の人こよつひかひあーと翹  
らえんも無念なりとや思ひたまふ  
らんとしてとのうきよつけよま  
ー廣瀬京濃三科肥前ととーして  
すかくとよ廣瀬三科水よりてか  
やとの西攻とらんす物れ教る  
すせめとんーたらん見くら

かろー詮りて西軍勢の子才  
あとしよ若敵あーして攻させんよ  
たとく攻とんーたらんよも何ら  
くろーつらへさ又とをさら一族の老  
武者若者ともたすけてし言名さ  
せんと思も勢よ不足あー  
ものよとおもひけよの若敵あ  
ーして攻らたらーもやめとつひら

は後をあらうとして六月廿二日の  
夜に入してとせし攻むる案の  
ことく若者とももの親父伯叔あとも  
せくつりーあとも多勢よりりて  
篠田端と攻やかりて次の城よせめ  
へらと改まらささとのけかの橋のか  
とりよとせつろく祿龍とと  
つとり城中よむつてともあつても

薬ともかさねてこみたりけま首  
たあらうらよさけてはらのみれ指  
とやふらと改先とものともせすそ  
まーしてくろあつれ楯ひつさけ  
えつく聲と出して攻入りて  
よ士卒あよたつたつたへさ次れ  
城よ攻入りて散くよ我ひーと  
かりあらさ人ばつとつりてい



ひーハ  
徳川殿の直政をーして一つの場と岸  
たまひ四十八日と銘々もしてそん  
作せさりー事ことをありしん  
聖人の人と教へたまふ事皆かくの  
ことー元よのつゞれ事よしもま  
人れみつゝんよ治めさすんも  
よよつ斤してひたさかとしてつぬ

を益かーまーして我よ望みてハ  
様よ望みて愛よ慈すーさものを  
此人れ教と教むへくす又直政  
徳川殿の作と承りて四十八日ハ  
とんよたえす思ひまうりーもよの  
つみろくすはんと以て身とも人  
も治めんと思ひめくくさかあ

主君と治さるべきよとの人の常  
れ人の言葉はよよ及ぶ聖賢の言  
業よしてもうあきたる所のやうに  
ふよ治ぬとつらう事とも思ひも  
くす常のた聖なる好みて通言  
と事一さまりとよものよよて  
た人のはふあうしよあとうよ  
くさくとやとるさ  
藩幹譜

一 天正十八年小田原陣の刻

権現極北先多と柳原小平太よ作舟ら  
川井伴兵衛ハ沸例よ兵吾やうよと  
作舟よ兵衛ハソもカヤ一のよ  
操り今日ハふくハ徳一上もよのよ  
大岡正多早りしりよして正産あさ  
此取と見て兵衛大岡と正付成さうく  
ゆつ兵今よしてゆとすめゆとも

権現極殊の外正立腹あさし正あさり成  
すまふ兵部さしうく私と先子へ作付り  
少しとヤルよー 駿河章

一 権現極井伴兵部少補藤原式部大補  
命せしき一、百人合戦一と一、お替  
し一番二番たりと一と云くあさり  
小田原陣一、式部一番兵部二番一、當兵  
部一番たりとんと然り

権現極涉許容あけれとも俄一、落と  
正替たまふ是よりして兵部えたり  
式部二番一、次く二番より兵部式部  
挨拶よりす兵部中務とハ  
挨拶より一、二番も關原の陣一、隙を  
互し不和とあきり 玉音抄

一 小田原陣のとき酒匂川の方井伴兵  
部殿の人数とささるる森と後にあ

しゝ人教立しと仰らまは兵部左河原  
よ備中よ是之ハ殊の外正腹立して惣  
別城際よして備中よハ森々あけりと  
後よして備中敵よ人教の如とや  
ハ見せぬやいよこをするものふれ  
敵森より備中のいち人の足教よしてと  
見すすすよよ備中より合懸あつす  
よよ正腹立よハ兵部左河原よして若

右の如よ備中よよハ正腹立よよ正馬  
れよよして正少刀とめさ正腰物よよしか  
福と取よちびつ子れ符と取りの法も  
之めすよよハ仰らまはよよ正腹  
よよして正少刀とよよ折正すよよ正少刀  
れ柄と深尾清十郎拾ひよよとして悪  
く中ハ三河之物語

一 天正十八年庚寅秋七月井俣兵部君上

州集福の城十二万石よ討せしむ兵  
池君國よ甲くよありて豊相ら兵  
池君と見しこよよ福し甲く君こよ  
坂東の領袖よ——て威望祐抄よ越え  
雄武三軍よ冠よと以し甲了  
君と

物軍よ進めし上州よ床たし——心  
別ち公ら君よとけらるるよと盡せり

と福少——厚きよく忘せんや要  
兵池君討——て回く兵池某世と没ら  
まてこよと忘せ——相ら又甲く他日  
し——豊源信と矢ハ二家兵と交ら  
夕——君ん——誰ら為よ物とら  
兵池君聲よ應——て回く某願ハ七人  
此福と捨し三人の劔よ依——ある家と  
——て和解せ——めん相ら嘆葉す

より良久にいてして早く君獨に器よ優  
らるのみよありて亦國と治らよ  
長せりるる國相下業廣記

一 源君の兵士垣見助兵衛五百石と知行  
すありるるさ京都よ使して海路  
よ篇と取して休む所よ香吉の妻新  
そ取と過けりる垣見の槍指もと彼  
家よして罪ありり者るは是と倉

て執へんとて垣見の旗篇よ遊んり  
垣見何よりと狼藉りりとして出向  
爾の子細と述よ彼者と出さる  
と有りて礼へへさ氣色りり垣見  
天りよ定法あり敢て遠くへ  
礼と以て立ものりり一應の届も  
くして漫よ遊よるる條礼よあ  
らす我今化境の使と誓めし奉給

より槍持ちく、奪とく、まゝに  
毀めしん能く、是と宿め、わきよ必  
らす布と結て、後遠愛りく、出さん  
と云し、手書と以て、詮授し、残せとも  
聞入す、避く、出さ、折果せと云ふ、こ  
とめ、宿とひ、く、と、取巻り、垣足  
た、怒りて、十文字の鞘と、も、理  
不盡の事、う、な、を、儀、な、く、治、こ、と、す

ま、け、ま、と、て、既、よ、我、よ、及、ん、と  
す、こ、の、と、さ、井、伴、兵、助、少、輔、五、改、行  
かり、こ、ま、と、く、て、垣、足、と、こ、と、て  
出、さ、し、め、ん、と、す、垣、足、石、の、首、尾、と、書  
け、ま、五、改、俱、よ、怒、り、て、貴、族、の、よ、と  
こ、ろ、む、り、り、あ、ら、ら、よ、聞、届、ぬ、耳、も、あ  
ら、ら、あ、ら、ら、一、も、一、と、さ、す、者  
々、々、悉、く、切、報、せ、と、て、後、者、五、百、兵

又と取しわけ分けては其勢ひも恐るる  
事ありく成り

雑信燭談

一天正十九年十二月廿八日近江中納言  
秀次園白よりりよまゝに祝儀よ  
家康よりり井伴直政とをいささしり  
よ秀次の命基とのかこみし居り  
よ基とよよと直政よ対面あり  
よ序よ我むりよ弥七郎とよひ

よさ共取の万千代とよ基とあり  
事あり其命に己を若く基よりり  
よるり當時の園白よあはれ其命の勝  
負とよたよかひりよとのよまゝ  
よ改りける其儀も當時の四位の侍  
よ其ありて今としても昔よかひ  
事ハ此座ありまよよよ輝り事  
わくやけは秀次重しとよくの挨拶



もろりーとと  
諸録鞋細  
式上ー話

藩鑑卷之三百十一目錄

為部二

井伴兵部少輔藤原直改